

大学院教育学研究科教科教育専攻「教科指導力高度化演習」成果報告会

理科教育講座・佐野 栄

【はじめに】

「教科指導力高度化演習」は、平成 28 年度の大学院改組の際に新規開講された大学院授業科目である。平成 28 年度の大学院改組は、教職大学院（教育実践高度化専攻）の新設を主たる目的としたが、今後の教育学研究科の教職大学院への移行を見込んで、既存修士課程、とりわけ、教科教育専攻については、カリキュラムに教職大学院の要素をも包含する授業科目を導入することとした。本授業科目は大学院段階での実践力育成を目的として新設されたものである。教職大学院設置の際の資料には、本授業科目の位置付けを以下のように記述している。

（以下、設置の趣旨等を記載した書類より引用）

教科教育と教科内容の教員が協働で授業を担当し、両者の融合により研究的な実践力を育成しようとするものである。例えば、国語科における「やまなし」（宮沢賢治）の指導について、作品の解釈・分析、作品の背景・特徴、宮沢作品における「やまなし」の位置付け等は近代文学の教員が担当し、「やまなし」の教材史、教材としての特徴、先行実践とその課題、具体的な指導計画等は教科教育の教員が担当する。大学院生と二人の教員は常に同席して授業を展開する。これにより、教科教育担当の教員と教科内容（専門）担当の教員の融合が図られ、研究的な実践力の育成が期待される。

（以上、設置の趣旨等を記載した書類より引用）

【授業の内容について】

上記のような趣旨のもと開設された本授業について、3 年を経過してその状況を分析し、位置付けを再確認することとした。本年度の成果報告会では、2 回に分けて以下の 6 つの取り組みが公開された。

- 数学の指導法に関する内容
- フィリピンの民族：多様性の中の団結の物語
- 理科分野の実践活動を通じた指導力の向上
- 高等学校家庭科における性の多様性に関する授業実践
- ミュージカルを通して表現力を高めるための指導のあり方
- 特別支援学校の体育授業を創造する

【重要であると考えた点・参考になった点】

昨年に続き、「強化指導力高度化演習」の成

果報告会に参加し、その内容について考察を行う。今回報告した 6 教科の取組は、どのグループも十分な時間をかけて、教材の計画、準備、開発を行い、実践的活動を行っている。また、多くのグループで実践の振り返りを行っている。私が特に興味深く感じた報告は、保健体育領域のグループが行った「特別支援学校の体育授業を創造する」に関するもので、障害者スポーツの教材化と実践、さらに授業の評価まで行った取り組みである。この成果報告は、体育の学生が、特別支援学校中学部の生徒を対象に様々な競技を取り入れ、生涯スポーツとして取り組むきっかけを作ろうとするもので、評価方法まで具体的に考案している。また、他のグループにおいても、ルーブリックを導入した評価方法にいたるまで考案したものもあった。いずれの報告内容も、実際の教育現場において、直ちに活用可能と思われるほど完成度の高いものであった。

【「教科指導力高度化演習」の今後ほか】

平成 28 年度に教育学研究科に新設された教職大学院は、平成 32 年度を目処に拡充される。拡充に伴い、現行の教科教育専攻の役割は、教職大学院の教科領域の要素に組み入れられる。教職大学院における教科領域コースに求められることは、教科内容の実践的指導力の高度化であり、とりわけ、中学校、高等学校教員における需要が高くなる。現行の「教科指導力高度化演習」は、まさに、教職大学院における教科領域の役割の重要な位置付けとして継承される。今年度の「教科指導力高度化演習」を拝見して特に感じた今後の課題は、内容的にはかなり完成度が高められてきてはいるものの、その指導体制に関して、どのグループも教科教育と教科内容の教員の協働の上指導がなされているとは言い難いことである。今後の大学院改組の方向性をも加味すると、各教科では、教科教育と教科内容の教員の協働を一層充実させて、平成 32 年度の教職大学院教科領域が万全の状態に始動することを願う次第である。